

## *Nisei Daughter* に見る モデル・マイノリティの描かれ方 ——アメリカの人種差別構造に関する一考察

辻 美奈子

### 1. 白人優越主義と「モデル・マイノリティ」

「アメリカ」の一般的なイメージを想像せよと言われたとき、現代の日本に生きる私たちは、一体どのような社会を思い浮かべるだろうか。多文化主義が浸透し、あらゆる移民や少数民族が平等に暮らしている国を思い浮かべるだろうか。それとも、相変わらず白人主流の社会を思い浮かべるだろうか。多くの人がアメリカという国は建前では多文化主義を標榜しているが、実際は白人優越主義の国であり、<sup>1</sup> この国でエスニック・マイノリティが社会的、経済的成功を収めるのは難しいということを見抜いているだろう。このような状況の中で、日系アメリカ人や中国系アメリカ人は社会的階層を昇りつめ、平均所得も白人のそれと肩を並べるようになり、今日、彼らは白人とほぼ同じような地位を得たように見える。<sup>2</sup> 日系人の多くは自らの民族性を強調し白人主流社会と対抗してきたアフリカ系アメリカ人とは違い、白人の文化や価値観を自ら進んで受け入れ、アメリカ主流社会に同化することによって成功を手に入れてきた。<sup>3</sup>

同化することは、支配的な人種・階級の人々が作り上げた人種差別の構造の強化に加担することと同義とされ、しばしば否定的に見られる（Kim 35、村上 77）が、では逆に、アメリカにおいて、アジア系アメリカ人が白人主流社会に同化せずに何ら差別や偏見を感じることなくアメリカで生きてゆくことが果たして可能なのだろうか。1960年代以降、日系アメリカ人は、アメリカ合衆国においてももっとも「成功した」エスニック集団として「モデル・マイノリティ」<sup>4</sup>と形容され、賞賛されてきた。しかし、これは「モデル・マイノリティ」にならずにアメリカで成功することは、過去においてはもちろん、現在も未だ難しいということも示している。なぜなら、アメリカの覇権（社会的、経済的な仕組み）を握っているのは未だに白人であり、アメリカにおいて非白人が、白人が作り上げてきた社会構造に組み込まれることなく、社会的上昇を果たすことはほぼ

不可能だからだ。

しかしながら、アジア系アメリカ人の多くは「モデル・マイノリティ」となり賞賛されるようになってからも尚、反移民感情の影響を被るという悩みを抱え続けている（飯野 188）。彼らはひとえに「白人」ではない外見のせいで、あくまでも「マイノリティ」と見なされ続けるからだ。この悩みは初期のアジア系移民（中国系、日系）が、19世紀後半に経験した差別や偏見に基づく葛藤と同じである。したがって、アジア系アメリカ人作家がこの葛藤を現在も文学作品に描き続ける理由は、白人／非白人に関わらず、アメリカの人々の考え方の中心には相変わらず白人優越主義があるからである。

このように、差別や偏見が原因で、アジア系アメリカ人は自分の外見と内面の不一致を経験し葛藤する。この傾向は特に二世世代に顕著である。どの民族の移民にも当てはまることだが、アジア系も二世世代になると、自分を表現したり思考する際に用いる言語は「英語」であるため、彼らの思考様式や価値観はほぼ「アメリカ人」のそれである。しかし、外見は当然アジア系のままである。そして、自分の外見の内面のズレに苦しんできた多くのアジア系アメリカ人作家は、この苦しみを文学作品の中に表現してきた。このことを踏まえ、本稿では、二世の日系アメリカ人の主人公が、自分のエスニシティとアメリカ主流社会の価値観の間で葛藤する様子を描いた *Nisei Daughter* (1953) を分析する。その際、主人公がどのように自分の外見と内面の不一致の問題を解決しアメリカ主流社会に溶け込んでいったのかを辿りながら、アジア系アメリカ人が「モデル・マイノリティ」になることの意味を考察する。また、この作品を分析することでアメリカにおける人種間の力関係の仕組みも垣間見ることができよう。

## 2. 「モデル・マイノリティ」になる理由

この物語の主人公カズコの国籍は「アメリカ」であり、背負っている文化・言語も「アメリカのもの」である。しかし、カズコは外見がアジア系であるため周囲から「エスニック・マイノリティ」と見なされてしまうのだが、彼女の内面は「日本人」のそれよりも「アメリカ人」のそれに近い。第二次世界大戦前後、差別や偏見を経験することで、彼女はアイデンティティの葛藤、すなわち、外見と内面のズレを経験するが、物語の最後では白人側から見た「優等生」的な自己像をつくり上げ、「モデル・マイノリティ」となり、主流社会に溶け込んでゆく。

そして、物語は「自分の日本人の部分とアメリカ人の部分が葛藤することなく統合した」という主人公のモデル・マイノリティ的な発言で終わる。この結末は、アジア系アメリカ人は自分たちに向けられる差別や偏見に目をつぶり、個々人で内面の葛藤に決着をつけ、主流社会に受け入れてもらえる「モデル・マイノリティ」にならなければ、アメリカ合衆国で快適に暮らしていけなかったということを示しているのである。しかし「モデル・マイノリティ」にならなければ、アジア系アメリカ人が苦しむことなく暮らせなかったのなら、彼らが「モデル・マイノリティ」になること自体は非難されるべきことではないだろう。むしろ、責められるべきは白人／非白人に関わらず、あらゆる人間の心に潜む「自分以外の誰かを劣った者とする」ことで自分の優越性を感じる」という心の動きである。したがって、アジア系アメリカ人を「モデル・マイノリティ」にするのは、アメリカ社会の仕組みの底流にある白人優越主義であると考えられる。

### 3. エスニック・マイノリティから「モデル・マイノリティ」へ

*Nisei Daughter* 出版当時の 1950 年代は、アメリカの敵国の日本にルーツを持つ日系アメリカ人に対して風当たりが厳しかった時代であり、多くの日系人はできるだけ目立たないように生活し、経済的にも社会的にもより良い生活を目指し、主流社会への同化を試みていた時期である（江淵 139）。しかし、この事実に対し、スミダは“*It is notable in Sone’s case...that, writing in the aftermath of the war and the imprisonment of Japanese Americans, she could in her opening pages express the point from which an awareness of pluralism grew in her, contrary to widespread attempts to suppress Japanese Americanness before and in this very era.*”

(211) と述べている。仮にスミダが述べているように、出版当時、ソネがすでに自らの日系というエスニシティを肯定的に捉え、一人種・民族集団による覇権構造を否定する多文化主義を提唱するために *Nisei Daughter* を書いたとするならば、なぜ、主人公カズコに、日本語学校が終わって家に帰れば「本当に自分のいるべき場所に帰ってきた」“*I shed Nihon Gakko and returned with relief to an environment which was the only real one to me*” (28) という気持ちになるという発言をさせる必要があったのだろうか。<sup>5</sup> この作品には、本当にスミダが言うように多文化主義の主張が含まれていたのだろうか。彼の主張は、日系アメリカ人に対する差別や偏見が著しかった時代から数十年の時を経て、多文化主義がある程度浸透した今日だからこそできる主張ではないだろうか。事実、Stan Yogi

は、二世の日系アメリカ人作家は、当時、厳しい現実に直面しており、彼らは生活を立て直すことで精一杯であったと指摘している。

The immediate postwar years found many mainland Japanese Americans scrambling to rebuild their lives after the traumas of internment. Japanese American writers who might have seriously considered literary careers before the war now found themselves confronting basic economic necessities and a society that still regarded anything Japanese with suspicion, if not hostility. (125)

この指摘からは、*Nisei Daughter* 出版当時、日系二世はまだアメリカ主流社会の有り様に対して異議を唱える声を持っていなかったことが分かる。

この時代に日系二世として生きていたソネも主流社会に異議を唱えるどころか、カズコがアメリカの文化や食べ物の方を好んでいることを示す場面（53、82）、日本の文化に違和感を感じる場面（45）を多く描いているが、これはカズコがアメリカの文化や価値観を内面化している証拠である。また、“The Japanese Touch” という章では、天長節のセレモニーに日系の子供たちが退屈している様子（66）、退屈な行事から子供たちが解放され喜んでいる様子（70）、日系コミュニティの運動会（71）や年始のあいさつ回り（80）など、日系人の生活を子供の視点から描いているが、これはカズコが日系コミュニティは退屈で、自分がいるべき場所ではなかったと感じていたことを示している。そして同時に、著者ソネも子供時代、日本という国をどこか遠く離れた異国、また、日本文化を自分とはまったく関わりのないものとして眺めていたということを示しているとも解釈できる。

カズコによる家の中の描写についても同様のことが言える。家の中の日本的な品物が、カズコには外国の「エキゾチック」なものに見えていたことを示す以下の引用からは、彼女が「アメリカ人」の目を持っていたことが分かるだろう。

At first glance, there was little about these simple, sparse furnishings to indicate that a Japanese family occupied the rooms. But there were telltale signs like the *zori* or straw slippers placed neatly on the floor underneath the beds. On Mother's bed lay a beautiful red silk comforter patterned with turquoise, apple-green, yellow and purple Japanese parasols. And on the table beside the local daily paper were copies of *the North American Times*, Seattle's Japanese-community paper, its printing resembling rows of black multiple-legged insects. (11)

家の中の数少ない日本的な品物は、珍しいものとしてカズコの目には映っており、例えば、テーブルの上の日本語新聞の漢字の細かい活字がまるで昆虫の足のように見えるという描写は、外国人が異国のものを初めて見たときの反応を思い起こす。美しい日本の陶磁器や織物など色彩に目を奪われつつも、カズコが日常的に使うものはアメリカ製品である。したがって、英語やアメリカの文化のほうが身近であるがゆえに、彼女の眼には日本的なものが余計珍しく映るのである。

一家揃って日本へ里帰りするというエピソードにも、カズコがアメリカの文化を内面化していたことが示されている。両親にとっては帰国でも、アメリカ生まれのカズコにとっては「外国」への旅行であった。カズコは写真でしか日本を見たことがなかったので、道を行き交う多く的人力車を初めて見たとき「想像していた通りだ」と感嘆の声をあげる(90)。日本の風景はカズコにとっては異国の風景であったため、滞在期間中、彼女は外国人の目で日本を眺めていたということである。また、両親の故郷に滞在したときにカズコは日本の子ども達に「アメリカ人」とからかわれる(97)。「アメリカ人」すなわち日本人から見た「外国人」と呼ばれることによって、カズコが「自分はアメリカ人」という意識をより強く感じるようになっていく様子もここで描かれている。そして、日本から帰ってくる船上からシアトルの街を見たカズコは「故郷に帰ってきた」(108)と言う。これらのことは、主人公カズコの内面で「日系」の部分はあまり重要ではなく、むしろ、完全にアメリカ社会の価値観や文化を内面化し、アメリカに同化していたということを示している。

このように考えれば「ソネの自伝を『日系人の主流社会への同化を描いた作品である』と安易に解釈するのは間違いである」(207-208)というスミダの主張には納得がいかないだろう。むしろ、ソネも当時の同化志向に影響されておりそれが *Nisei Daughter* という自伝的な小説に表れたと考える方が自然である。つまり、規範や文化の内面化は同化なしでは起こりえないため、<sup>6</sup> *Nisei Daughter* は、著者のソネも白人社会への同化志向（出版当時のアメリカ社会のイデオロギー）に無自覚に影響されていたことを示す物語であると考えられる。<sup>7</sup> なぜなら、この自伝の出版当時、日系アメリカ人にとって「日系」というレッテルは邪魔なだけで、剥がして捨ててしまいたいものだったということは容易に想像できるし、また、このレッテルは竹沢が言う「エスニシティのスティグマ化」(22)

と同じものであると考えられるからだ。竹沢は、自分のエスニシティが邪魔なものとして感じられるようになったとき、人間がどのような行動を取るかを次のように説明している。

エスニシティがスティグマ化された時、エスニック集団の構成員はその集団への自己同一視を抑圧しようとし、特にアイデンティティの変換が可能な場合は、意識的レベルで当該社会によってより好ましいとされる集団と自己同一視しようとする。(中略) 自己の人種・エスニック背景を隠し別集団の構成員になりすますことはその例である。(23)

この時代、日系であることは痛みを伴う「スティグマ(傷)」を負っているようなものだっただろう。そして、誰しもがそのような痛い思いなどしたくないと思うのは当然である。したがって、当時、多くの二世の日系アメリカ人は、自分の「日系」というエスニック・アイデンティティを否定し「アメリカ人」というアイデンティティに自己を同一化させる傾向が強かった、もしくは、アメリカ主流社会に同化するために自分の身体的特徴は無視していた、と考えるほうが妥当だろう。なぜなら、同化するほうが自分のエスニシティにこだわって生きるよりはるかに「楽」であり、差別や偏見を回避しやすかったからだ(Uba 74)。

カズコが最終的に「アメリカ人」になったと思い込むに至るまでに経験したアイデンティの葛藤は、物語の中盤に特によく現れている。中盤の章の“*Pearl Harbor Echoes in Seattle*”は、日系というエスニシティを否定しながらも周囲からは否応なしに「日本人」と見なされる、という外見と内面のズレに悩むカズコの姿を描いた章である。ここには、第二次世界大戦勃発というニュースが日系コミュニティに伝わってきたときのエピソードが描かれているのだが、戦争勃発のニュースを聞いたときのカズコの反応は次のような発言であった。“*Mama, they [the Japanese] should never have done it...Why did they do it? Why? Why?*”

(147) この *they* (彼ら=日本人) という代名詞は、カズコにとって「日本人」は *we* (私たち) ではなく、自分とはかけ離れた存在の *they* (彼ら) であったことを示している。しかし、自分の意思とは関係なく、自分の身体的特徴が日本と自分を否が応でも関連付けてしまうという事実は、現実のアメリカ社会に生きていればカズコにも当然分かることだった。このような日本への繋がりが、彼女の内面においてアイデンティティの混乱を引き起こしていた。これは「自分は、軽蔑すべき、哀れな日本人の頭とアメリカ人の頭という二つ頭の頭を持

っている。どちらも自分の得にはならない」(“I [Kazuko] felt like a despised, pathetic two-headed freak, a Japanese and an American, neither of which seemed to be doing me any good” [158-159]) というカズコの発言からも窺える。この“two-headed freak”という言葉は、カズコの分裂した内面や二重の自己を示しており、ここでの彼女の精神状態は、まさに“the ‘dual personality’ of hyphenated Americans” (Palumbo-Liu 298) と呼べる状態にあるだろう。このように、著者のソネは物語の中盤において、主人公カズコに自分のエスニシティを否定させることによって、カズコの内面で「日本人」の部分が「アメリカ人」の部分より下位に位置していることを表現している。また、これは著者ソネの内面でも「アメリカ人」と「日系人」は同等に扱われておらず、自伝出版当時、著者自身もアメリカ主流社会のイデオロギーを内面化していたことも示しているだろう。

そして、この物語の最後の場面は、エスニック・マイノリティは、白人上位、その他の人種は下位という人種のヒエラルキーの中でしか自分を語り得ないこと、つまり、日系アメリカ人は一方的に同化を強いられる側であり日系アメリカ人自身もその要求に進んで応じる「モデル・マイノリティ」であったことを示している。最後の場面には、主人公が日系人収容所<sup>8</sup>を出た数ヶ月後に両親の残っている収容所を再び訪れるというエピソードが描かれている。収容所に残っていた両親から、彼女は「自分たちが日本人であったため子供たちには収容所に入れられるなど、嫌な思いをさせ、苦勞をかけた」という謝罪を聞くが、謝る両親に “I don’t resent my Japanese blood anymore. I’m proud of it....I used to feel like a two-headed monstrosity, but now I find that two heads are better than one.”

(236) と、日系人であることを今は誇りに思っていると応えている。しかし、これは両親の気持ちに配慮しているだけで自分の本心を述べた発言ではないと捉えることもできる。

物語を締め括る以下のカズコの発言も、もはや日系であることは自分にとってそれ程問題ではなく、差別や偏見は全て解決したと述べているように受け取れる。

I was going back into its main stream, still with my Oriental eyes, but with an entirely different outlook, for now I felt more like a whole person instead of a sadly split personality. The Japanese and the American parts of me were now blended into one. (238)

自分は現実社会で生きてく覚悟のできた「完全な人間 (a whole person)」に成長し、自分の中の日本的な部分とアメリカ的な部分は完全に融合したとカズコはここで述べている。しかし、実際はカズコの日本的な部分がアメリカ的な部分に吸収されただけである。なぜなら、日系人に対する人種差別は依然として現実社会に存在していたし、一個人の内面で差別や偏見が原因で生じるアイデンティティの葛藤が解決されたからといって、それがすなわち、現実存在する人種差別がなくなったという証拠にはならないからだ。

#### 4. 「モデル・マイノリティ」になる必然性

多くの読者は、日系人の収容所体験を描いたこの物語の結末を読んだとき、どこか「はぐらかされている」と違和感を感じるのではないだろうか。そのように感じる理由は、著者ソネが *Nisei Daughter* の出版当時の社会状況を考慮せずに、この作品の結末を描いたからだと考えられる。第二次世界大戦後、アメリカでは相変わらず人種差別がまかり通っており、日系人に対する差別や偏見も存在していた。また、差別は「見えない」という陰湿なかたちを取り始めているだけで現在でも依然として存在する (Kitano 11)。このように、実情は何も変わっていないアメリカで、何とか自己の精神を崩壊から守り、自分の生活環境をより快適にしようとしたアジア系アメリカ人の試みが、カズコのように自分の外見を無視して「モデル・マイノリティ」になり主流社会に妥協する、という方法だったと考えられる。主人公カズコは、アジア人と白人の間にある身体的特徴の違いを直視しようとし、その二つの間の差異を、どうにかして「見えないもの、ないもの」だと思い込もうとした。しかし、いくらそのように思い込んでも、現実存在する差異や差別・偏見は消えないということをカズコは見落としている。白人とアジア系との間に「差異はない」と思い込もうとしても、それは身体的特徴として歴然と「ある」のである。したがって、*Nisei Daughter* の結末には、主人公が「アメリカ人」になれたと強く思い込むことで、差別や偏見から自由になったと「一人で納得した」様子が描かれているだけなのである。したがって、この結末は、カズコ個人の内面で文化的同化が果たされたことを示しているだけで、エスニック・マイノリティが主流社会に一個人・市民として参入できる構造的 (社会的) 同化<sup>9</sup> が果された、ということまでは示していない。

カズコのように自分を「アメリカ人」でもあり「日系人」でもあると思い込むこ



とを、両者の統合であり多文化主義を主張する態度であるとするか、それとも、ある種の思い込みか勘違いであるとするかは解釈によって変わってくるだろう。しかし、当時の社会状況や主流社会の人々に浸透していたイデオロギーを勘案するならば、後者（勘違い、思い込み）の方が妥当ではないだろうか。つまり、最後の場面で、自分の中の「アメリカ人」の部分と「日系人」の部分が反発しあうことなく統合されたと述べたカズコは、単に自分の「日本人」の部分が「アメリカ人」の部分に吸収されてしまったことに気付いていないだけなのである。事実、*Nisei Daughter* とほぼ同時代に出版され、同じように日系二世の主人公を描いた *No-No Boy* (1957) では、主人公の内面の「日本人」の部分と「アメリカ人」の部分の統合することはない (16)。また、戦争が終結し、収容所から日系人が出られることになっても、相変わらず反日感情が強かった西海岸へ彼らが戻ることは歓迎されなかった (Sone 216、タカキ 309)。また、多くの日系人は新しい定住先に落ち着いても、収容体験で負った「二級市民」というスティグマを克服することができず「日系であることを恥ずかしく、あるいは罪であるかのように思い」(飯野 130)、日系というエスニシティを否定する傾向にあった。さらに、カズコが自分の内面に「アメリカ人」的な部分と「日本人」的な部分があると意識すること自体、著者が、アメリカ社会においては両者は別々のものであると認識していたことを示している。

日系人は今も昔も外見のみで判断され「外国人」と見なされている (Suzuki 25)。現代では、あからさまに「アジア系は劣っていて、不可解で、ずる賢い人種である」と発言する声はほとんど聞こえない。しかし、アジア系アメリカ人の移民の歴史の中で、白人によって「劣った人種」というレッテルを貼られてきたアジア系が、今なお、自分たちと白人はどこか違う存在であると、心のどこかで感じているとしてもそれは無理もないことである。したがって、最後の場面のカズコの発言は、主人公の内面における「アメリカ人」の部分と「日本人」の部分の完全な統合と捉えるよりも、アジア系の身体的特徴を持っている限り周りからは「外国人」と見なされるという事実から目を背けて、主流社会の価値観を内面化した「モデル・マイノリティ」が発した「優等生」的な発言だと捉えるべきである。

## 5. 「モデル・マイノリティ」の存在意義

本稿では、*Nisei Daughter* に描かれる日系二世のアイデンティティの変遷を追

うことで、「アメリカにおいてエスニック・マイノリティが社会的に成功するにはモデル・マイノリティになることが必然」であることを示してきた。それでは最後に、そもそもエスニック・マイノリティが「モデル・マイノリティ」となり主流社会に同化することが、なぜ否定的に見られるのかという問いを考える必要があるだろう。

アジア系アメリカ人のようなエスニック・マイノリティの同化が一様に否定的に見られる理由は、それがアメリカの人種差別構造に加担することにつながると考えられているからである。しかし、逆に、自分のエスニシティにこだわり同化を拒絶すれば多様で柔軟性のある人間社会をつくり出すことができるのかと問われたら、そうとも言えない。なぜなら、エスノセントリズムは排他的であるため、かたちを変えた人種差別主義でしかないからだ。要するに、アジア系が白人と同等の地位や影響力を獲得すること自体は、根本的に差別や偏見をなくすことにはつながらない。むしろ、ある一つのエスニック集団が社会において発言する力（その社会への影響力）を強めるということは、そのエスニック集団がいずれ白人に成り代わり、また新たな覇権構造（差別や偏見）を生み出す可能性につながる。

「異質なもの」のなかに「共通なもの」を認める成熟した視線を誰もが持つことが理想だが、現実はそのほど単純ではない（Fong 282-283）。人は自分を取り巻く社会に複雑に制約され影響されて生きているものである。色眼鏡をかけずに他者を見ることなどほとんど不可能に近い。白人がアメリカにおいて経済的、政治的な権力（覇権）を持ち続ける限り、エスニック・マイノリティが主流文化への同化を無意識に選んでしまうのは避けられないことである。また、人間社会において、経済的、政治的に成功した者が当該社会において「優れている」と見なされる文化を築くのは必然であり、アメリカで「優れた」文化をつくり上げてきたと見なされている人々は、今のところ、白人なのである。したがって、エスニック・マイノリティが「優れた」主流社会に同化することの是非を問うよりも、なぜ人は自分とは異なる他者を「劣っている」もしくは「得体が知れない」と認識し、差別や偏見を持ってしまうのか、という心の動きや意識について考えるほうが重要である。なぜなら、人々の意識が変わって初めて物事の認識のされ方も変わってくるからだ。

往々にして非難されがちなアジア系アメリカ人の同化傾向であるが、その意義を認める意見を最後に紹介して、「モデル・マイノリティ」になること自体は

責められるべきことではないと主張したい。米山リサはアメリカに同化することを次のように説明している。

「アメリカ化」とは、したがって、アジア系移民 - 市民が、米国の法的・立法的な国家機構によって従属化＝主体化（subject-ification）されることをつうじて国民化される過程を指す。アジア系アメリカ人は、既存の制度的配置に自らを託し、従属化されることによって、声を有する主体となる。この国民化のプロセスは、ナショナルな公共圏におけるアジア系アメリカ人としての存在を可視化するだけではない。歴史的知に関する既存のパラダイムにとって解読可能なかたちで、その発言を提示することもまた求めるのである。（164）

アジア系アメリカ人が主流社会に同化すること自体には罪はなく、それはむしろ、アメリカ社会を変えていくための声を得ることであるという米山の主張からも分かるように、アジア系アメリカ人の同化を主流社会への無批判な迎合と捉えるべきではなく、社会を内部から徐々に変えていく発言力を得ることと理解すべきなのである。「モデル・マイノリティ」と見なされるアジア系アメリカ人は、一見、無批判にアメリカ社会の白人の覇権構造に加担しているように見えるが、社会の成り立ちや仕組みというのはそれほど短期間で変わるものではない。また、外部からいくら圧力をかけてもその効果はあまり期待できない。よって、国や社会というものは内部から徐々に変えていくしかないのである。*Nisei Daughter*の主人公カズコのように、日系人が主流社会に同化し「モデル・マイノリティ」となり社会的成功を収めてきたこと、そして、これからも「モデル・マイノリティ」として発言力を強めていくことは、アメリカの人々の意識の中に潜む白人主流文化を優れていると見なす姿勢を崩す方法になり得るかもしれない。

## 注

- 1 以下はアメリカの白人中心主義を示す見解。“Much antiracist discussion of whiteness...has been dominated by a concern to show that whiteness ‘still matters’ and that the hierarchies and inequality associated with it are, if not as bad as ever, at least, ‘still with us.’” (Cashmore 453)
- 2 アジア系アメリカ人の平均家族所得は\$53,635 であり、白人の平均家族所得\$46,305 を上回る（2000 - 2001 年のデータ、U.S. Census Bureau）。アジア系家庭には家計の担い手が二人以上いる場合が多いため(飯野 178)、平均家族所得が白人のそれを

上回るのは当然だが、一人あたりの所得になるとアジア系は\$24,277で白人の\$26,134を下回る。しかし、それでも他のエスニック・マイノリティよりは白人の所得に近づいている。

3 Richards 参照。

4 高学歴で専門職に就くことが多い日系人が自ら進んで主流社会に溶け込む努力をしてきたことが他のマイノリティの手本になる、という意味で使われる言葉(飯野 173)。

5 主人公一家はホテル業を営んでいたため、家には「普通」のアメリカ人が常に出入りしていた。また、一家はアメリカの生活様式や文化を生活に取り入れていたため、カズコにとっては自分の家のほうが日本語学校や日系コミュニティよりアメリカに近い場所だった (Sone 10-11)。

6 価値観や文化の内面化は同化なしでは起こりえないことを Chen は次のように述べている。“The process of internalization attempts to incorporate and integrate values, traits and expectation into the self...It appears that the process of internalizaion involves a certain level of conformity.” (40-41)

7 以下は、マイノリティと「見なされる」ことで主流社会の価値観が無意識に内面化されることを示す見解。“The very fact he or she can imagine being looked at *just so* [marginal] means that his or her alienation is predicated upon a sense of difference installed prior to the act of self-consciousness—he or she has already internalized the dominant’s point of view. (‘they view us as such’).” (David Palumbo-Liu 300)

8 第二次世界大戦中、アメリカ西海岸に住む約 110,000 人の日系人は敵性外国人と見なされ、合衆国政府によってアメリカ内陸部に建設された強制収容所に収容された(飯野 99、タカキ 299)。

9 Milton M. Gordon の移民の文化変容説によると、移民は最初に文化的・行動的同化を果たし、その後、構造的同化に達するが、第一世代の同化は不完全なため、その後、二、三世代分の期間が必要であるとしている(梅棹 768)。二世のカズコはまさにこの移民の同化過程の最中にいると考えられる。

### 引用文献

- Cashmore, Ellis, ed. *Encyclopedia of Race and Ethnic Studies*. London: Routledge. 2004.
- Chen, Jessica L. “The Internalization of the Model Minority Stereotype as a Predictor of Depression among Chinese Americans.” Diss. California School of Professional Psychology, 1995. Ann Arbor:UMI,1995. 9534157.
- Fong, Timothy P. *The Contemporary Asian American Experience : Beyond the Model Minority*. Upper Saddle River, N.J. : Prentice Hall, 1998.
- Kim, Claire Jean. “Playing the Racial Trump Card: Asian Americans in Contemporary U.S. Politics.” *Amerasia Journal* 26.3(2000-2001):35-65.
- Kitano, Harry H.L. and Roger Daniel. *Asian Americans : Emerging Minorities*. 3rd ed. Upper Saddle River, N.J. : Prentice Hall, 2001.

- Okada, John. *No-No Boy*. Seattle: University of Washington Press. 1976.
- Palumbo-Liu, David. *Asian/American: Histirical Crossings of a Racial Frontier*. Stanford, California: Stanford University Press, 1999.
- Richards, Phillip M. "Model Minorities." *Massachusetts Review* 37.1(Spring 96). 14  
September 2004. (電子ジャーナル、EBSCOhost より)  
<<http://search.epnet.com/Community.aspx?authtype=ip&ugt=7433361335033913334330333493356320E361D36E126E96&return=y>>
- Sone, Monica. *Nisei Daughter*. Seattle: University of Washington Press, 1979.
- Sumida, Stephen H. "Protest and Accommodation, Self-Satire and Self-Effacement and Monica Sone's *Nisei Daughter*." *Multicultural Autobiography: American Lives*. Ed. James Robert Payne. Knoxville: University of Tennessee Press, 1992. 207-243.
- Suzuki, Bob H. "Revisiting the Model Minority Stereotype: Implications for Student Affairs Practice and Higher Education." *New Directions for Student Services* 97(Spring, 2002): 21-32.
- Yogi, Stan. "Japanese American Literature." *An Interethnic Companion to Asian American Literature*. Ed. King-Kok Cheng. Cambridge: Cambridge University Press, 1997. 125-288.
- Uba, Laura. *Asian Americans: Personality Patterns, Identity, and Mental Health*. New York: Guilford Press, 1994.
- U.S. Census Bureau. "United States Department of Commerce News." 28 September 2004.  
<<http://www.census.gov/Press-Release/www/2002/cb02-124.html>>.
- 飯野正子 『もう一つの日米関係史—紛争と協調の中の日系アメリカ人』 有斐閣、2000年。
- 梅棹忠夫監修、松原正毅編 『世界民族問題事典』 平凡社、2002年。
- 江渕一公 「日系アメリカ人の民族的アイデンティティに関する一考察—カリフォルニア州サンノゼ日本町における三世の行動の分析を中心として—」 綾部恒雄編 著 『アメリカ民族文化の研究—エスニシティとアイデンティティ』 弘文堂、1982年。 Pp.137 - 199.
- タカキ、ロナルド 『もう一つのアメリカン・ドリーム』 阿部紀子・石松久幸訳、岩波書店、1996年。
- 竹沢泰子 『日系アメリカ人のエスニシティ—強制収容と補償問題による変遷』 東京大学出版会、1994年。
- 村上由見子 『アジア系アメリカ人—アメリカの新しい顔』 中公新書、1997年。
- 米山リサ 『暴力・戦争・リドレス—多文化主義のポリティックス』 岩波書店、2003年。